

日本本文學講義

落窪物語 五回 (下)

永代美知代

祭見物を済まして歸つて來た北の方は、落窪を盗まれたと知つて呆れてしまつた。これはきつと安濃の仕業に相違ないと思ふが、併し女の手で戸を破つたりすることは出来ない。男が手傳つたとすれば何者であらうか。折角好いお針女を抱へたつもりで、一生娘達の縫物をさせようと思つて居たのに。口惜しいことだと腹を立てたが仕方

がない。追手を向けやうにも誰の業とも解らず。勿論左近の少將と姫と親しい間なことをば知らう筈も無い。

二條の邸に落着いた少將は、これまでの辛かつたことを姫に訊いても、別段委しい話もしないので、安濃に尋ねて、北の方の残念な仕打を殘らず聞き取ると、怒つてしまつた。

『よし／＼今に應が屹度返報して呉れる』と云つて、なほさら姫を大事にいたはり、安濃を老女のやうな格式に進めて左衛門と呼ばせた。十幾人と云ふ新參の女中達を召抱へて、姫を感さめ仕かせるのであつた。

中納言家では以前から四の君を、是非左近少將に嫁げたいと思つて居た。といふ譯は、左近少將が帝のお氣に入りで、當時非常に勢力のある左大將の御子だからである。仲人を以て少將へ申込むと、心に思ふ仔細のある少將は早速承知した。北の方の喜び方と云つたらない。この世の中に自分

ほど聳取り上手な者はあるまい、など、散々な御自慢であつた。

いよ／＼明後日が興入と云ふ日になると、左近少將も内々四の君を可哀さうだと思つたけれど、北の方への復讐に、自分の替玉に兵部少輔と云ふのを使ふことにした。この人は首のひよろ長い馬面の、顔の生白い鼻の馬鹿にいかつた、面白の駒と仇名を取つた男である。ついでまだお嫁の話などあつた例もない醜男なので、少將の代りになるのが嬉しくつて堪らない。だが何も知らず結婚の式を済ませてしまつた四の君こそ好い面の皮である。北の方から今度の聳君は左近少將だと聞かされて、それは好い兄弟が出来ると、大變肩身を廣く樂しんで居た藏人少將は、近づきの挨拶をして見ると、思ひがけない面白の駒なので、突然扇を叩いて笑ひながら坐を立つた。

中納言も呆れて腹を立てたが、併しもう結婚の披露を済ました以上、この上騒いで、もしやまた四の君が面白の駒風情に見捨てられるやうでは、恥の上塗りを

てめた、そして、姑に當る左大將の北の方の氣にも入つて、二人まで立派な男の子を産んで居た。おまけに左近の少將の官位も昇り、誠に結構な身の上であつた。中納言は姫をばもう行衛不明になつて、生死も解らぬものとはばかり思ひ込んで居たので、今輝くばかり美しう出世した有様を見ると、思はず嬉し涙をこぼして、何故もつとやさしくしてはやらなかつたらうと、他の娘達よりも疎ましくしたのが恥かしくもなる。

『定めしひどい奴だとお思ひになつたでせう。しかしどうぞ悪しからずお赦しを願ひます』と、左近の少將が返報の事を詫びると、

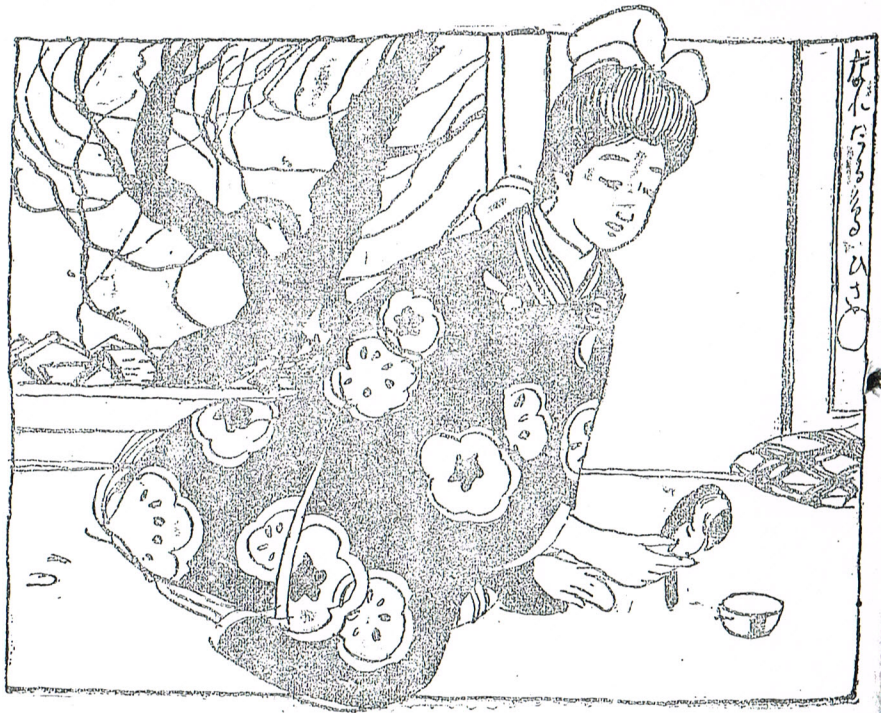
『いや、それもこれもみんな姫を愛しての餘りだと思ふと、塵は決して悪い氣持はしません』と、中納言は老の眼をしばたゝくのであつた。

併し、北の方は相變らず落窪の君に對して好い感情を持たない、三の君四の君を不幸な身の上にしたのも、みんな落窪のせいだと恨む、そして落窪の君

と思つて、口惜しがる北の方を無理となだめた。する内四の君が姫娘になつた『欲しいと思ふ藏人少將の方にはまだ一人もなくて、本當にこんな因果な事は無い』と、斯う北の方はなほさら口惜しくなつて来る。その上、藏人少將は何處へ行つても『いや、面白の駒は如何しました』と、友達から冷かされるのが嫌さに自然三の君との間も疎ましくなつて、終には離縁になつてしまつた。

左近少將から後に面白の駒のことを聞かされた安濃や帶刀は、北の方に對して胸が隨いたやうに思ふのであつたが、やさしい姫は、さすがに四の君が可哀さうで、父中納言の氣持を察すると悲しくなつて、どうぞもう餘まりひどい返報をしないやうにと、左近少將に頼む、併し少將は今暫らく北の方を疑りさせてやるのだと、折さへあれば困らせるのであつた。だが、終にはやさしい姫の心を思ひ遣つて、中納言を我が邸に迎へ、改めて對面をする。

もうその頃、落窪の君は左近少將の北の方になつ



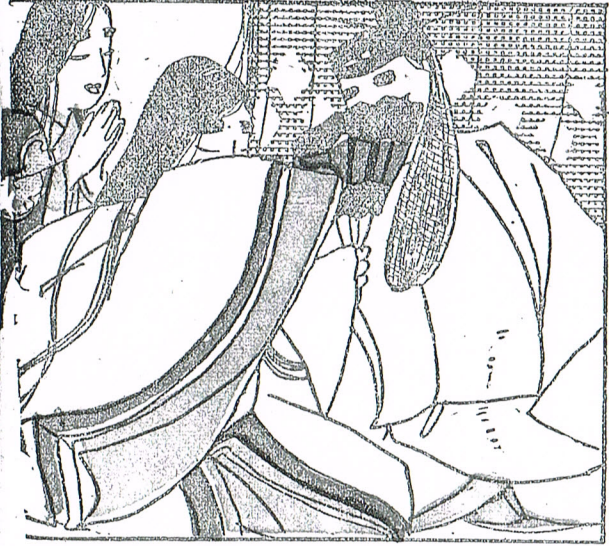
の出世を心憎いことに思ふのであつたが、左近少將は中納言には勿論のこと、北の方をはじめ賀君達の上

にまで、萬事好いやうにと盡すのであつた。

する内に、中納言は重い病に打臥した。何も他に不足はないが、たゞ若い者共に追ひ越されて、一生

大納言にもならず死ぬのが残念だと思はれるのを聞いた左近少將——もうこの時には大將になつて居なければ、解り好いために左近少將と書き續けることにする——は、どうか中納言を満足して死なせたいと思つた、併し大納言には定員があつて、やたら昇進出来る譯のものではない。で自分の職を護る決心で、父君の左大臣に相談して、早速帝の許を得た。

改めて帝から下された旨を



見た中納言は、病苦を忘れて喜んだ。それもこれもみんな落窪の君と云ふものがあつたらばこそ、左近少將のお陰だと云つて嬉し泣きのであつた。一にも落窪、二にも落窪と中納言がゆかしがるのを聞くと、北の方は腹が立つて、いつそ死んでしまへとまで思ふのであつた。いよく危篤だと云ふので、落窪の君も邸へ看病に来た。新大納言は、息のある内に遺産分けをして置くといつて、重立つた財産をみんな落窪にくれることにして、邸をさへ落窪へと云ふのであつた。

「落窪々々と仰有らなくなつて落窪には立派な良人がついでちやありませんか。この邸は妻の私が頂くのが正當です、それとも私を乞食にするお積りなのですか」と、斯う北の方が泣い

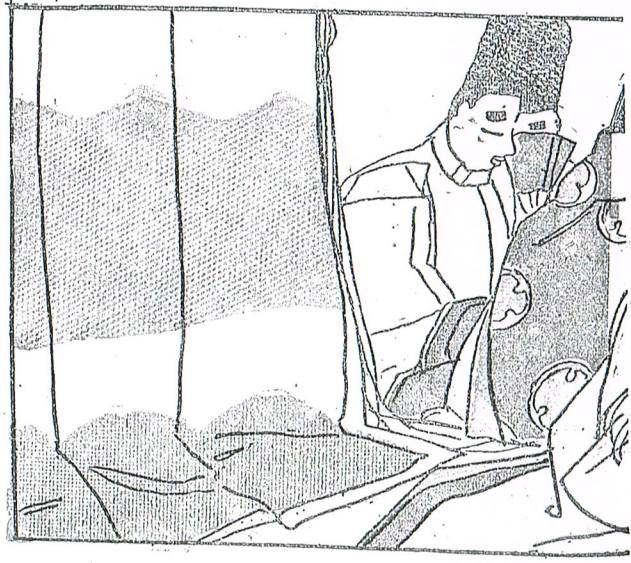
て怒る。それをやつとみんななで制して、到頭新大納言は死んでしまつた。勿論落窪は領地などを遺産に貰ふ積りはなかつた。

左近少將もその通りで、家令が大納言の遺言だからと云ふのを無理に斷つて、全部返してしまつた。その上に自分の引で

北の方の總領の男子で、落窪の君には異腹の兄に當るのを左衛門佐に昇進させ、中の君の聲の

左少辨がひどく貧乏で領地が欲しいと云ふのを、美濃守にその

外の兄弟達をも重く用ひるのであつた。して又、北の方、三の君、四の君達へも、夏冬の衣装から萬端の調度を、故大納言が生きて居てするよりも、もつと立派にし送つた。



と願つて居る矢先きなので、大喜びである。併し、いよく四の君が筑紫の帥と結婚して、いざ一緒に任地へ出立しようと云ふ段になると、やつぱり織兒はいけなもんだ、親切めかしく見せかけて、實は親子に生別れの悲歎をさせやうためであつたなどと

或時、左近少將が參内してゐると、今度筑紫の帥

は親子に生別れの悲歎をさせやうためであつたなどと

憎々しい愚痴を云つて泣くのであつた。北の方は七十の上まで長生をして、落窪の君が立派に支度をして居にしてあげたのだが、それを嬉しがつて居るかと思ふと、また精進が嫌になつたり、些少ばかり腹を立てると、すぐこれだからなさぬ仲は駄目なものだなど、死ぬまで憎い口を利くのであつた。

落窪の君はその後又女の子を一人、その下に男子を二人、都合五人の兒持になつた、上の二人は十四の歳に宮中へ出仕して、何とも云へない美しう育つた女の子は、十三で内裏へ入つたが、後には帝の后になられた。左近少將は父大臣が太政大臣を辭職した後を繼いで、四十歳にもならない内に、位人臣を極め、人々からこの君でなくてはならぬやうに尊敬されるし、落窪の君は、委え果てた白絹の袷一枚の昔に引き代へ、今では太政大臣の北の方、后の宮の御母と敬はれて、結構な身の上になつた。帯刀は右衛門の尉と云つて居たが、官位を得て三河の守になる、衛門の安濃は帯刀と一緒に任地へ行つたりして、後にまた典侍になつ

てときめいた典侍は大變な長壽を保つて、二百歳まで生きたと云ふ話である。

——(完)——